

2008年1月15日  
第174号

題字 住谷悦治



燎原社  
(京都の民主運動史を語る会)

代表 岩井忠熊

事務局  
京都市左京区高野東開町1-23  
第三住宅33-302 井手幸喜  
〒606-8107  
tel & fax 075 (722) 3823

# 賀正

歴史の動向を見ぬく力を — 年頭のごあいさつ

代表 岩井 忠熊

昨年は参院選の与野党逆転、保守大連立の頓挫、またイラク戦争の完全な行きづまりの中で多国籍軍参加諸国の漸次的な撤退のはじまり、ブッシュ米政権の苦境となつていきます。歴史は大きな変わり目に直面したことが明らかです。正しく歴史の動向を見ぬく力が大事な時になりました。新しい年をむかえ「燎原」も前進します。倍旧の御支援をお願いします。

雑草の実が  
土深く芽生える  
あゝ水母は太陽に  
闘いこぼる太陽

## 中井あいさんの書

この一枚  
中井あいさん(1890-1978)は公選の京都市教育委員(48年から5年間)をつとめ、京都母親連絡会、新婦人の会長など長く民主・婦人運動の中心で活躍された。晩年は書を学び多くの作品を遺した。3月28日は没30年にあたる。上の書は「歩みつづけて—中井あい その人と生涯」(中井あい追憶出版行会編)より。

### 執筆者紹介

宮田栄次郎(みやた・えいじろう)

神戸経済大(現神戸大)卒業、労働運動に入り、京都合同繊維労組委員長、京都勤労者学園専務理事、

京都社会労働問題研究所所長などを歴任。北区在住。

小畑哲雄(おばた・てつお)

元京都大学同学会執行委員。長く大阪私学教職員組合委員長などをつとめる。八幡市在住。

佐藤匡子(さとう・きょうこ)

元部落問題研究所職員。山形市在住。

小田切明徳(おたぎり・あきのり)

本会世話人。山宣性教育研究室長。伏見区在住。

京都民統・市長選挙の思い出

載 樹々の緑を—戦後京大学生運動私記— 第4回

連 忘れ得ぬ人 木村京太郎さん(上)

『燎原』誌が生まれる頃

BOOK 7 例会案内/情報スクラップ/編集後記 11

宮田栄次郎

小畑哲雄

佐藤匡子

小田切明徳

2

4

8

10

# 京都民統・市長選挙の思い出

## 「革新」京都市長誕生

一九五〇年（昭和25）新春の京都は、にわかに来た市長選挙で沸いていた。現職の市長が、政府の地方行政調査委員に選ばれ、任期を一年残して退任したのである。三年前の首長選では一敗地にまみれた革新陣営は、こんどこその決意を込めて立ち上がった。出馬を表明した高山義三弁護士（社会党府連顧問）の推進には共産党府委員会が一步先んじ、内部に異論を抱えていた社会党も結局同調して、統一候補の誕生となった。

選挙母体・全京都民主戦線統一会議（民統）結成会場の映画館・公会館（現在の高島屋百貨店の東南部分にあった）は、七千の群衆が壇上まで埋めつくす盛況をみせた。民統には労働組合を先頭に京都の広汎な民主的大衆団体がこぞって参加し、四条寺町下ルにあった労働会館に事務所を構えた。

三年前の地方選挙で当選した共産党議員は市会一人だけ。これに対し社会党は府会・市会とも各十八と多

数だったが、当時のデフレ・大不況のなかで国民の不満は高まり、一九四九年（昭和24）初頭の総選挙では共産党が急速に勢力を伸ばした。京都では社会党が五議席から一議席に後退したのと逆にゼロから二議席へ躍進、活動家の質・量でも圧倒していた。共産党徳田球一書記長の片腕の長谷川浩氏がひそかに高山邸の地下室に泊まり込んで陣頭指揮する熱の入れようだった。東山の知恩院・華頂会館で開かれた共産党の公開黨員集會に、社会党府連幹部の岡信太郎氏が出席して「共産党は民統を勝たすため馬の足になってくれ」と訴え、議論を呼んだ。

保守の側も統一候補づくりを努めたが成らず、民主自由党と民主党連立派は田畑警門京都市助役を、民立党野党派は和辻春樹元京都市長をそれぞれ推す三つ巴戦となり、二月八日の投票は保守の分裂に助けられて十五万票の高山が、十二万弱の田畑、九万弱の和辻を抑えて勝利した。

本来なら、民統の使命はここで終わるはずだった。ところが知事が市長選の資金違反に問われて辞職、引



宮田栄次郎

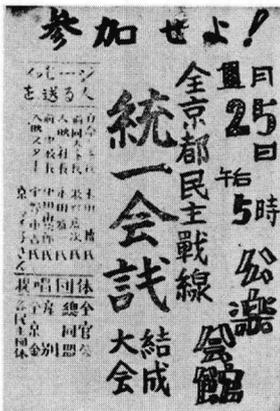
き続いて京都府知事選挙が降って湧き、民統は息を吹き返した。勢いに乗った民統はこのときの保革一騎打ちにも勝利し、四月二十日の投票で蜷川虎三知事が誕生する。

## 罰金二千元也

当時、私は労働組合のローカルセクターの一つ、総同盟京都連合会の書記局長だった。総同盟の事務所が高山法律事務所の一部を借りていた関係から高山氏とも近く、その当選のため全力投球した。選対本部では情報宣伝を担当、「総同盟は高山義三の推薦を決定した」というビラをガリ版で何万枚も刷って組合員に街頭で配らせたり、同じ内容のステッカーを総同盟傘下の輪タク労組の車

の背中に貼り付けて市内を走らせました。昨今と違って取り締まりは随分緩やかだったが、さすがに目に余ったのだろう、不法文書配布容疑で私は太秦警察署にパくられた。黙秘を通していたが、そのうち上部で話がついたらしく、「大した事件にはならないから適当に供述して早く出てこい」との指示がきた。そして市役所の地下にあった市警本部（当時の警察は国と自治体で分かれていた）へ回され、小川次長の説教を聞かされたあと釈放となった。当選後、高山氏は「苦勞だった」と四条河原町のレストランでビールをご馳走してくれた。その頃のビールは日本酒より割高で、労働会館食堂で焼酎や二級酒の常連だった私にはぜいたくだった。

このときの処罰は二千元。当時の労働者の賃金は製造業の平均で月八千円くらいだったから、今なら数万円に相当するだろうが、結局、新市長のポケットマネーで処理された。ところで、当選後の高山氏の評価

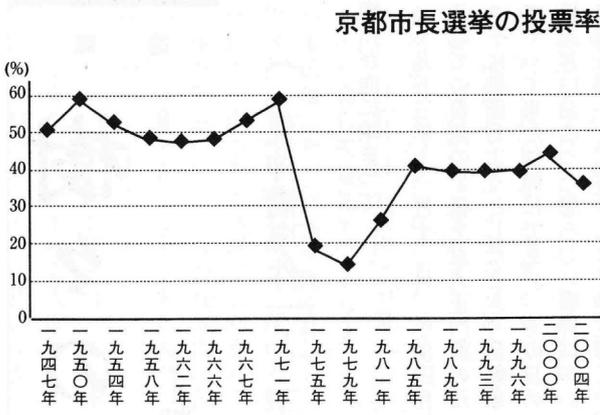


ガリ版刷りのポスター

は分かれる。革新陣営に推されて市長の座を手にしたものの、次第に右寄りなスタンスを移し、革新を堅持した嵯川知事との対比で「保守・反动」とたたかれることも多かったが、イデオロギーを横に置いて行政家としてみる限り、本人自身がアイデアマンだった上、広くブレインを集めることにもたけていた。戦後八人の歴代市長のなかでは、やはりピカ一といえるのではなからうか。

### 戦いの激しさを上下する投票率

この稿は『燎原』編集者の湯浅氏の要請に応じて、五十八年前を振り返って見たものであるが、目前には戦後十八回目の京都市長選（二月十



七日・投開票）が迫っている。この現実を目を閉ざして過去の追憶にふけるだけでは芸がないから、あまりスペースはないが、こんどの市長選にも触れておく。

まず図表のグラフをご覧がたい。これは過去に実施された十七回の京都市長選の投票率なのだが、先に取り上げた一九五〇年（昭和25）の民統選挙は五八・五七％で、投票率の高さでは二番目である。最も高かったのは一九七一年（昭和46）の船橋求己（市助役、社会・共産推薦）と自民・公明・民社の推す永末英一（民社党代議士）対決で、五九・〇〇％だった。

この間、一九五〇年～六〇年代は五〇％前後を維持したものの、自民から共産までの五党が相乗りして船橋市長を推した一九七五年（昭和50）と一九七九年（昭和54）は、選挙民が白けて一九・五〇％、一六・一三％まで落ち込み「五色豆選挙」と批判された。

そして、共産党が独自の立場から推薦候補を立てるようになった一九八五年（昭和60）以降は、投票率もそれなりに持ち直したが、五〇年～六〇年代の水準に比べ一〇ポイント低い四〇％台で横にはう形だ。

共産党推薦候補が最も肉迫したのは、木村万平氏が自民・公明・民社の推す田辺朋之氏を三二一票差にまで追い上げた一九八九年（平成元

である。このときは社会党も独自候補を擁立、新人ばかり九人が争う乱戦だった。その割りに投票率が四〇・六〇％と意外に伸びなかったのは台風による荒天の下での投票という特殊事情によるものだった。

### 過去4回の選挙結果 (○印 当選)

回	年月日	自民党推薦保守・中道候補	共産党推薦革新候補	保守系無所属	計	投票率
14	1993年 8月8日	○田辺朋之 246,452 (自民・社会・民社・公明・社民連・新生・日本新)	井上吉郎 199,893	—	446,345	41.55%
15	1996年 2月25日	○榎本頼兼 222,579 (自民・社民・さきがけ・新進・公明)	井上吉郎 218,487	嵯川澄村 13,023	454,089	41.59%
16	2000年 2月6日	○榎本頼兼 284,225 (自民・民主・公明・社民・自連)	井上吉郎 211,727	嵯川澄村 14,103	510,055	45.90%
17	2004年 2月8日	○榎本頼兼 231,822 (自民・民主・公明・社民)	広原盛明 174,847	新井信介 25,090	431,759	38.58%

### 無党派層にどう切り込むか

ところで、前回の二〇〇四年（平成16）の投票率は三八・五八％とこのところの最低で盛り上がりには欠けた。このときは、自民・民主・公明・社民四党の支持を得た現職の榎本市長が、共産・新社会の推す広原・前府立大学長（龍谷大学教授）を抑えて三選されている。広原候補は無党派層に浸透するのではと見る向きもあったが、結果は図表のようになり二〇〇〇年（平成12）に井上吉郎氏が得た票を四万近く減らすこととなった。

その理由は単数でないが、最大のものとして私は、共産党組織が広原氏を自己の候補として推し切れなかった不完全燃焼ぶりであると指摘せざるを得ない。

今回、現職の榎本市長が引退して門川大作（市教育長、自民・民主・公明推薦）・中村和雄（弁護士、共産推薦）、岡田登史彦（洋傘製造卸会社相談役）の新人三人が出馬する。共産・革新陣営が先の教訓に学んで工夫をこらし、全力投球でこれまでの峯とされる〇二年知事選で森川明候補が京都市で獲得した二二万票（投票率四五・二五％）を超えたと、新たな展望が開けるのではないか。（〇七年12月22日記）

（元・京都社会労働問題研究所所長）

## 樹々の緑を

戦後京大学生運動私記

第4回

小畑 哲雄

## 《「荒神橋事件」と「市警本部前」事件》

鴨川が血に染まって

一九五三年十一月十一日、小山田和子宛ての前記の手紙を京大正門前のポストに投函しようとしたとき、自転車であつて来た仲間にであい、その日の昼過ぎにおこった恐ろしい事件について話を聞いた。いっしょに学生部にかけてつけるとそこには、血だらけになつた学生が一人いた。

「荒神橋事件」の現場に私はいなかった。そこで、「我等が未来のために」から少し長くなるが、引用させていた

問題の日、十一月十一日は京大天皇事件が発生して、満二年目の最後の日だった。又問題の場所、法経第一教室、時計台前広場は、言論の自由を抑圧し、戦争へと進もうとする勢力に対する反戦自由の勢力の結節点だった。十一月十一日、そういう状態の下に、一時から時計台前広場で全日本学園復興会議会場として京大法経第一教室使用のための抗議集会が開かれていた。

一方時を同じくして、「わだつみ像」（本郷新作）の歓迎市中行進が、「わだ

つみ像」を載せた自動車を先頭に、末川立命館大学総長、浅井、梯西立命大教授がオープンカーで続き、その後「反戦と自由」「わだつみの悲劇をくり返すな」「限りなき自由を」等のプラカードを持った学生約三百名によつて行われていた。この像は東大等関東の大学で建立を拒否され、立命館大学に建立のため東京より送られて来たものだった。京大時計台前で開かれた抗議集会終了後、この集会に集まっていた全国の代表の学生、京大、同大、立命大生など約一五〇名は届出ずみのデモ「立命大わだつみ像行進」に参加しようと、午後四時二〇分頃、京大吉田分校生を先頭に京大時計台前を出発し、列を組んで京大吉田分校内を通り進んで行った。

東一条交差点で市警パトロールカーの写真フラッシュの光を受け、医学部構内を抜けて、立命大への近道である鴨川荒神橋のたもとにさしかかった。この列を組んだ学生に対して、橋のた

もとに待機していた市警パトロールカーからデモを解散せよとのスピーカー放送があつたが、音量は小さく、歌声に消されて学生には徹底しなかつた。

四時四十五分、プラカードを下げて、静かに学生の先頭が荒神橋中央部を渡つた時、西岸で警戒していた市警中立売署員二ヶ分隊二十二名が松浦警部と警官一名を前に出して、不法デモとしてこれを阻止にかかった。しばらく交渉が行われたが、学生は納得せず通行許可をせまり、松浦君を代表として出し、話し合いを求めたが、警官隊は二列に並び、学生側責任者松浦君を西岸の荒神橋派出所へ拉致しようとした。これに対し、松浦君は派出所へ連れて行かれて孤立しない様に、学生の隊列の中に逃げて帰った。学生はその場で、双方の代表者による話し合いを求め、松浦君が拉致されるのを防ぐためスクラムを組んで彼を守った。

しかし警官隊はこれを容れず、正面及び北面から三角包囲の態勢をとり、警棒で激しく突き上げながら学生を南側欄干に圧迫していった。この圧迫が強かつたため、瞬間、両側欄干約十三米がはがれ、一、二、三、四列にいた学生十三名が約七米下の河原、石畳の

上に折り重なつて転落、鴨川の水はみるみる紅色に染まっていった。学生は直ちに救助におもむこうとしたが、狼狽した警官隊はスクラムを組んでこれを阻止し、東のたもとを廻り、川をわたつて救助に向かう学生さえ笛を吹いて阻もうとした。

しかし、鬱々たる学生の非難と、「学生を殺すのか」という絶叫にはじめて救急車を呼び学生の救出を始めた。顔面を朱に染め身動きもしない負傷者は学生と警官によりて河原から運び上げられ、重傷四名はパトロールカーで第二日赤に、重傷三名、軽傷三名は上京消防署救急車で府立医大病院にそれぞれ収容された。

## ドクターストップ

以上が、「荒神橋事件」のあらましであるが、一部、会場問題などでギクシヤクした所はあつたにしても、多くの、いろんな立場の学生、そして教官、職員までも含めて学園をどう復興させるか、真剣に議論を積み重ねてきた学園復興会議は、この事件によつて、予想もしない展開をみることになつたのである。

当日午後六時半から、学園復興会議をしめくくる統一文化祭が、立命館大学ホールで開かれた。参加者約一千名、予定のプログラムは変更されて、「抗議集会」となつてしまつた。

私も、「学園復興の歌」の作詞者として登壇したもの、そんな立場での

挨拶などできる雰囲気ではなかった。歌の練習もやらず、作曲者が一度歌っただけで終わった。私は、関西学連の委員長として、京都市警本部に抗議に行こうとよびかけた。

数百名のデモ隊が市警本部に向かった。立命、同志社、学芸（現在の京都教育大）の各大学からは、学生部長などの教授が付き添っていたが、京大からの教官は、だれ一人もいなかった。小山田和子に宛てた手紙の中で私は次のように書いている。

「市警本部の扉は、みなびたりとめきられていました。市警本部長は今夜は事態を静観するといいました。デモは、中立売署にむかいました。突如そこに催涙ガスがなげこまれました。デモ隊は市警本部までひきかえしました。市警本部長は、学生の代表五名とあうといいました。代表は中に入り、他の学生達は、中立売署に行つて来た抗議団の報告をきいていました。その時、中立売署の方から、警官隊がやつて来ました。学生はスクラムを組みました。催涙弾がなげこまれました。それはすぐに消されました。京都学芸大の学生部長が『警官の指揮者はどなたですか』とたずねました。『そんなもんいるかい』というのが返事でした。いきなり、警官隊は学生におどろかかしました。女子学生の悲鳴がきこえ、ガスがもくもくと立ちこめていました。しばらくして帽子が、靴が、靴が散らばったところに、頭をわられた学

生が倒れていました。『まるでゴロツキじゃないか』と学芸の学生部長はいつていました。立命の学生部長も興奮していました。頭をわられた学生を三人、日赤にかつぎこんで、手当てをし、自動車でみんなを送り届けました。」

このとき、手当てをしてくれた医師が、三人の学生の傷を見て、まず驚き、そしてはげしく怒ったことを、私は今でも覚えていいる。三人が三人とも、左の側頭部の皮膚を殆んど測つたように七センチ程、見事に割られていた

のであった。警棒を思い切り振り下ろさない限り、そのような傷ができるわけがない。警官が警棒を使用するときには、肩から上へは振り上げない、という規定があったはずであったが、そんな規定など、まったく無視されたまさに「暴行」であった。

「夕刊京都」1953年11月13日付

### 《二つの事件のその後》

時には、何をしても、風上に退避することが一番だということにはわかっていたが、そのような経験のない学生たちは、なすすべもなく、ただ警官隊の

荒神橋、市警本部前での流血を伴った事件に対する抗議の嵐がまきおこつたのは、当然のことであった。私は、

暴力に蹂躪されたのであった。私の疲労は、極限に達していた。その夜、電車ももうなかったし、タクシーを利用する金もなかった。西陣の友人（平沢正夫）の家まで何とかたどり着いて、電話をかけると、まだ立命館では抗議集会がつづけられているとのことであった。ただ、警察が非常警戒に入っているから、気をつけるように、と電話に出た仲間は忠告してくれた。そこで、私はその友人の家に泊めてもらった。

翌日、吉田山のふもとの下宿に帰りついたものの、そのまま、寝込んでしまった。私がロシア語を教えていた白峰診療所の医師が来てくれたが、しばらく外を飛び回することは諦めなさい、関西学連の活動も止めなさい、と言われてしまった。ドクターストップである。

十二月の始めには関西学連の大会を開く予定になっていたが、それにも出席できず、私は、文書で委員長を辞任する旨を書き送らねばならなかった。こうして、私の京都大学での「学生運動」は終わったのだった。

下宿で病に倒れていたもので、その後の模様については、「我等が未来のために」を参考に記録していくことにした

## 教授団も真相究明に

十二日の午後、七千名にもおよぶ抗議デモ、抗議大会が開かれ、その場で選出された抗議団は、他の民主団体の代表とともに、市警本部と市役所におもむき、小川市警本部長、高山市長に面会を申し込んだ。当時は、自治体警察の時代であったから、市警の最高の責任者は市長であった。市警のほうは、十九日午後には会うと約束ができたが、高山市長は、市議員たちと高雄の山奥に出かけていた。電話で面会を求めたが、拒否されてしまった。

その日の夜にも、立命館大で市民、労働者、農民をも加えた抗議大会が開かれ、二千名が参加したといわれる。この集会で、「荒神橋、市警本前事件共同闘争委員会」が成立し、京大同学会内に設置されることが決まった。

翌十三日には、この事件の真相究明教授団が成立した。この教授団の一員である立命館大板木法学部長はこの教授団の出したパンフレットに次のように書いておられるそうである。(「我等が未来のために」より)

「荒神橋事件について考えて見よつ。一体警察は何の必要があつて京大生の渡橋を阻止したのであろう。通した所で学生達は交番を襲撃しようというのでも何でもなく三、四丁先の立命大ホールは文化祭に参加するだけのことでは

はないか。警官の言い分は、学生がブラカートを掲げ(この点にも疑問がある)、スクラムを組んだことが公安条例違反だから阻止したという。形式的にはそうかも知れない。しかし、公安条例の目的は公安を害するおそれのある場合にこれを阻止するにある。実害の予想されない場合に法規を楯にとり、民を網するのは良吏の、特に公僕の為すべき業ではあるまい。次に、例え防止する必要があつたとしても、何故橋にかかる前(川端署所管)、又は橋を渡り切った所(中立売署所管)でしなかつたのか。狭い橋上で押し合えば、よし欄干の腐朽がなかつたとしても、河中に転落する可能性のあることは判り切つたことではないか。多少でも人命尊重の意識があれば異なつた処置がとられてしかるべきではなかつたか。

市警本前の事件について考えて見る。わたしは荒神橋事件よりもこの方が一層悪質であり責められるべきだと思つ。ただし前者は重過失であるにもせよ、過失と認められるように思つが、後者に到つては完全に計画的襲撃だと思わざるを得ないからである。何らの武器をも持たず、整然と四角の隊形を組んで抗議大会開催中の一団に対し、側面から、一言半句の警告もなしに、しかも一名の学生が警官の指揮者を探して交渉しようとしている最中に、突如として警棒を揮つて襲撃し、骨折その他数十名の重傷者を出すとは何たることか。後からの警察の言い分では、

学生の一人が投石してガラスを破つたからだといふ。私達三人(竹上幸夫、藤田同志社大の両学生部長、は終始玄関前に立ち、学生と共にいたが、誰もガラスの破れた音を聞いた者はいない。万々一それが事実であつたとしても、学生全体は整然と秩序を保つていたので、一個の投石があのような惨事を正当化するものとは正気の者には考えられない。(中略)

ここに権力の名にかけられた暴虐を見て、齡すでに五十五に達し、血の気の少ない私もさすがに興奮した。いやしくも道徳を口にし、正邪を説く者がこの暴虐を看過してよいであらうか。」

## 市警本部への議義

現場に立ち会つた教授が自分の目を通して、警察の行為をこのように激しく批判したのであつた。

以後、数日間、抗議の行動がさまざまな形で展開されたが、十九日には市警との会見が行われた。これも最初は、市警当局は会見拒否を策したが、深夜十二時半、小川市警本部長は、抗議団二十名の面前に現われた。

以下、抗議の内容を「我等が未来のために」から引用する。

警一橋から落ちたのは前から十五、六列のもので、デモ隊の前後の圧力でふくれ上がった落ちたのだ。抗一前列の学生が警官に押されて落ち

たことははっきりしている。十五、六列目が落ちたとする根拠は何か。警一目撃者と警官の証言による。

抗一自撃者とは誰だ。人殺しをやるうとした警官の証言が証拠になると思ふか。

警一警官の証言がすべて正しいとは思われない。

抗一前列の学生が突き落とされたことは現場の写真(十二日付「京都新聞」等)からも明らかである。われわれはこの写真のどれが誰であり、どの様な傷を負つたかを明白な証拠を挙げて示すことが出来る。(写真を何枚も提示)

警一しかしこんな前の者が落ちるものか。

抗一本部長今何を言つた。君は想像だけでなくを判断しようといふのか。(騒然となり、小川本部長前言を取消す)。

抗一この写真の前列の学生が落ちたことが本当であつたら、警察の主張を取り消すか。

警一前列のものが落ちたことが確認されれば、今迄の市警側の調査は根底から覆されることになる。

抗一十六日の市会警察委員会での市警側の証言を覆えされることになるがどうか。

警一そうなる。

抗一市会警察委員会での市警側の証言では、警察は直ちに負傷者の救助を行ったと言っているが、このど

の写真にも警官は一人もいないではないか。それだけでなく、西詰から救助に行こうとした学生を阻止したのはなぜか。

(写真を何枚も提示)

警―直ちにこのことは第一着という意味ではない。事態を確認するや直ちにこの意味だ。

抗―これらの写真がとられた以前に、警官が駆けつけたという反証はあるか。

警―ない。

抗―学生が救助に行こうとするのを阻止したのはなぜか。

警―その様な事実はない。

抗―十一日夜、現場の責任者松浦警部補は、はつきりと阻止したと言っているがどうか。

警―(返答なし)

抗―地理的に見て、西詰にいた警官が、東詰まで廻って川を渡り救助に行つた学生よりも早く現場に到着出来る条件にあったことは認めめるか。

警―認める。遅れたのはすぐる行動の敏速性を欠いたからだ。

抗―警察が行動の敏速性を欠くとは何事だ。一体なぜか。

警―事態の認識が遅れたからだ。われわれも君達以上の資料は持っていない。客観的な資料は新聞以外にはない。結果的に見て橋上で阻止したことは反省する。

抗―結果論ではないぞ。最初からの計

画の犯行だ。

抗―市警前で逃げる学生を後から殴つたことはいないと警察委員会(言っているが、証拠はあるか。

警―証拠はない。あの様な催涙弾が投げられて混乱した事態では調査不能だ。

抗―証拠はない、調査不能とは何だ。殴つたことは写真で明白だ。

(写真を何枚も提示)

警―市警としては反省すべき点は反省する。これ以上この様な形で会見を持つ意思はない。

抗―人殺しに反省とは何だ。われわれはあくまで何回も会見を要求する。

小川市警本部長は私服に取り囲まれて退席、ここで会見は一方的に打ち切られた。

ここで、一つだけ付け加えておきたいことがある。それは、この事件の因に、荒神橋そのものの荒廃があったことである。戦時中の金属の供出で、この橋の欄干も木製のそれに取り替えられ、戦後数年間放置されていたのであった。高山市政が大通りや市役所前の美装のような事業にのみ税金をつぎ込み、市民の日常生活の場をおきざりにしてきたことの一つでもあったのだ。

(本号で完結の予定でしたが以下次号に。小見出しは編集部)

## BOOK

### 京都市長選挙最大の争点

#### さらば！ 同和中毒都市

中村和雄十寺園敦史 著

いよいよ京都市長選がはじまるが、最大の争点はやはり同和行政であろう。本書は、相次ぐ職員犯罪問題、市の積極的な協力のもと解放同盟が長年にわたって補助金を騙しとっていた問



題、さらに同和奨学金の返済を市が無審査で全額肩代わりしている問題についての寺園氏のレポート、市民ウオッチャーで中心的に追及してきた中村弁護士との提言で構成されている。

もう同和行政は終了していると思う市民もいることだろうが、「だれも返さない、だれも催促しない」同和奨学金はこの先二十年間も続くのである。しかもそれを認めた張本人が市教委の門川氏だったというから、なんとしても中村市長実現で市政を刷新したいものだ。(かもがわ出版・1050円)

#### 京都・同和「裏」行政

#### 現役市議員が見た「虚構」と「真実」

村山祥栄 著

帯に「終わったはずの『同和行政』に隠された深き闇」とある。左京区選出の最年少議員(無所属)が、「議員調査権」を駆使しながら、逆差別の「現場」へ出かけ、終わらない「同和对

策事業」の実態に迫っている。とりわけ暴力団の組事務所化？した改良住宅の居実態や、ボクシングジムまである地区内のコミュニケーションセンターの内部写真など深い「闇」の一部が明らかにされている。(講談社+a新書・840円)

# 忘れ得ぬ人

## 木村京太郎さん

〈上〉

### 佐藤匡子

佐藤匡子さん（山形市在住）から「小説『橋のない川』の主人公のモデルとなった木村京太郎さんのこと」と題した一文を寄稿していただきました。2回に分けて掲載します。

### 〔初めての出会い〕

一九六三年の十月、河原町七条西南角にあった部落問題研究所に当時高2の私は初めて訪れたのでした。高校の文化祭に藤川清氏の写真パネルを展示するために借りに行ったのです。

その時、座っておられた横顔しか拝見出来なかったのが木村京太郎さんでした。その一年半後よもや私が部落問題研究所で仕事するようになる

とは思っていませんでした。

おこがましくも高3で社会科学研究所クラブの部長になった私は、家庭の事情もふくめて真剣に進路を考え、石田真一先生の推薦で一九六五年四月に部落問題研究所に職員として入りました。高卒新採は私が初めてだということもあり、事務局では私を歓迎して下さいました。

### 〔文化厚生会館時代の木村さん〕



木村京太郎さん（1902-1988）。部落問題研究所川端分館で写真撮影。山田梅雄氏（『写真集・水平運動の人々』より）

一九六四年の秋に左京区の新町の京大薬友会館にほど近い所に文化厚生会館が設立され、その管理・運営もまかされた部落問題研究所が、部落問題の解決を求める全国の人々からの熱い期待を受け

て新たな出発をした頃に私は迎えてもらったのです。当時、理事長は奈良本辰也氏、事務局長には東上高志氏、事務局長には日本史研究の横井清氏、会計の井上秀雄さん、出版係の中島日出和君、そして私でした。間もなくして、北藤五郎さんという教員志望の方が編集部に入られました。

木村京太郎さんは事務局の執務室のとりの理事長室に毎日出勤して来られました。しよっちゅう出入りされる研究員に馬原鉄男さんがおられました。

朝、お茶を持って私が理事長室に行くと、新聞の「赤旗」が届いていない、「どうしたのだから」とおっしゃるのです。おだやかなお顔のやさしい眼差しが一瞬するどくなり、「私らの若い頃は新聞が届かなかったり、約束した時刻に仲間が現れないと、もう、このアジトが気づかれたのかとひどく気になり、五分と違わずに行動したものののです」と言われ、「橋のない川」の主人公、孝次のモデルという認識しかなかった私はどんなにか厳しい時代を過ごされてきた人なのだと尊敬の念を深めていきました。

木村さんは主に、月刊誌『部落』や研究紀要の『部落問題研究』の校正をしておられ、最後に木村さんに眼を通して校了となったのでした。これがまた「すごいもの」

で、木村さんの記憶や知識の確かさに感心させられ、編集にたずさわるスタッフはしばしば脱帽だったのでした。

木村さんは水平社運動の時代から機関紙誌の編集にあたられ、ご本人もそれがお好きで、得手ということもあって、文字通り、組織の裏方としてずっと支え続けて来られた人だったと聞きました。それが、一九六〇年代にも変わらぬ姿勢で取り組んでおられたということでしょう。

私が入所した一九六五年は部落問題をめぐる動きでは忘れられない年です。八月に同和対策審議会の答申が出されました。一九六三年頃から部落問題の解決を求める解同を中心とした国民運動は国策の樹立を求め、全国行進を行い、画期的な闘いを展開しておりました。精かな男らしい闘士の三木一平さんに初めて会ったのもこの頃です。「同和審答申」の評価をめぐって朝田善之助グループが魔女狩りを始めていきました。「答申」を認めない者は共産党だと踏み絵に使い、長年の苦難にみちた闘いで、とにもかくにも「答申」を出させた闘いの正しい教訓を引き出すことなく、「答申」の評価として正しいというのではなく、まちがっている部分もあると言おうものなら、全て共産党だという枠組みを作り出し、朝田氏は解同の分裂をはかっていったのです。

〔木村さんは仏のような人〕

かくして、一九六六年一月二十日、私たちは平常業務を行っていた事務室に突然、暴力で押し入れられ、差別者だと決めつけられ不法占拠され、着のみ、着のままで追い出されたのでした。以後、教育文化センターに一時期、東上さんの自宅にしばらく居て、そして東竹屋町の仮事務所に移転したのでした。

この間、私が体験したことは、まさに激動を身に受け、実力と能力以上のことを発揮しなければならなくなったことなのであります。この間私が眼のあたりにしたことは貴重な歴史に残る体験でした。

朝田氏は運動家としては三木一平氏にかなりのコンプレックスを抱いていたと思います。人間としての人気、運動家としての識見、権力を見る眼の違いなど、どれをとってみても格がちがいました。また、どうしても一目も二目も朝田氏が置いていたのが藤谷俊雄先生でありました。七条地域にたかせ保育園を経営し、学者としての業績の多さ、深い人間性の懐の広さなど抜群でしたから：藤谷先生については奈良本氏にとっても敬意を表して余りある人だったと聞いています。

そして、朝田氏が何と言っても頭の上からない人が木村京太郎さんでした。木村さんこそ朝田氏の生涯の

ほとんどそばにいて痛いほど朝田氏を熟知していた人です。朝田氏の借家の田中馬場町に住み、私が入所した年に右京区の鳴滝にようやく自宅を建て、併設して一ツ星寮という寮を作られ、京都に出てくる苦学生のために安く下宿を提供されたのでした。そこでお世話になった人のお一人が文理閣出版の黒川美富子さんです。立派な出版人となりました。

分裂した解同の家父長みないな朝田氏は木村さんには絶対自分たちの側についてももらいたいと願っていたと思います。

木村さんは決して声高に朝田氏への批判などおっしゃる人ではありません。しかし、朝田氏のでかした京都製靴の会社の破たんのおとしまつを黙々とやりとげられ、木村さんの奥さんまで日雇い労働までなさって朝田氏のために出資なさった人々に資金を戻されたこと聞きました。ですから、木村さんの批判など出来ようはずもなく、どなたからも木村さんは仏様のような人だと思われていました。それなのに文化厚生会館を暴力で襲うとは木村さんに恩を仇で返したようなものではありませんか。私は、昔の話は東上さん、馬原さん、三木さん、中西さんから主に聞いたのです。こんな話を通して私は部落問題研究所を守ることがどんなに大事なことで、勇気をもってい

若いということのみで張り切つてはいたと思います。

この暴力事件で奪われた読者名簿を復活させ、全国の人々の多くの協力を得て部落問題研究所は支えられました。誌代の集金にも行かないと私たちの給料もおぼつきません。あちこちに集金に行きました。京都市内は三木さんと車で行きました。

〔部落問題研究所を守って〕

奈良県の同和問題研究所という所にも毎月十五部ほどの「部落」誌を送っていました。その集金には私が

一人で行くことになりました。この奈良県同和問題研究所というのは事務所が奈良県庁の中にあり、自主的な研究機関とは言えないところもありました。役員の朝田派の解同のメンバー、K氏を中心にいました。案の定、私をバカにして「どんな研究活動をしているのか判らない様な所にどうして金を渡さなきゃならんのだ」と言われました。私は三木さんと東上さんからの知恵の口移しで必死に話しました。「部落」誌の発行は続けていくし、研究活動も直ちに開始する体制を作っています。誌代はすでに送付したものの請求であり、今回の事件を理由にされることはあたらない」と。後日、K氏と言えども尊敬する木村さんに対して「先日、小娘が誌代の請求に来よってからに、生意気にも理屈をあれこれ並べよ

て、見上げたものだ」と払うに至つたいきさつをしゃべったとかで、木村さんは後日なんと私の肩にそっと手をのせて「あんたさん研究所をよう守ってくれはりました。ありがとうさん」と言つて下さったのです。その時の木村さんのやさしい眼差しと私のような者にも期待して下さつていると胸が熱くなり、さらに張り切つて行こうと思つたことでした。

文化厚生会館事件は実に短い期間

なのにあまりの多くの出来事で教訓

はいっぱいつまっています。

木村さんは、他人には著作を説得してお勧めになるばかりで、ご自身の著書がありませんでした。馬原さんや、中西さん、東上さんのお勧めもあり、「水平社運動の思い出」というタイトルで『部落』誌に連載されるようになり、(のちに新書版で刊行)大評判になりました。ここに登場してくる人々は、水平社を創立した阪本清一郎さんや西光万吉さんはもちろんのこと、私など知らない人々もおられます。木村さんはその当時、朝田派によつて名誉を傷つけられた人々の歩んだ道のりを事実として細やかにしるされたのでした。読者には木村さんの人間味あふれる想いが伝わり、事務局ではよく、「文は人なりだね」とうならされておりました。

(元部落問題研究所職員)

# 『燎原』誌が生まれる頃

小田切明徳

○「土曜会」が出発点

本会創立総会時の写真が本紙の前号に載ったが、特定できぬ人がいた。その話を聞いていたが、その総会に居合わせた私も三〇年近く経ると記憶があいまいになる。そこでその辺りのことを残しておくのも意味があるようだ。

「山宣没五〇周年記念事業」が前年の一九七八年から準備をすすめられ、盛大に各種の行事が行われた（『山宣研究』5号）。関係者・山宣の同志たちが多数集まった場となったが、結集した旧友たちは大いに励まされ、「この続きをやる」と同実行委員会の担い手であった木村京太郎、井垣次光、北牧孝三、細川三西らが中心になって土曜会を作った。「この続き」と言うのは、研究者の塩田庄兵衛の協力を得て「京都の革新の伝統を守る会」を作ろうとした。まず、手元にあるその準備会を呼びかける案内状を紹介しよう。

「私たち旧友クラブの仲間で開催している土曜会は今回の山宣五十周年の行事にも京都の山宣会に協力してきました。山宣の業績を継続発展させることは私たち老人だけでなく新しい世代を継ぐ青年の任務であると思います。又、京都の民主革命の先輩たちの歴史の伝統を受け継ぐためにも、京都の民主運動の歴史の研究は大切です（後略）」（このプリントは井垣が作成した）として同年七月一九日にその準備会を部落問題研究所で行う予定であったが、研究所の都合で京大会館に変更された。この変更通知を木村が作り、九月三〇日に実施した。呼びかけは「仮称戦前の社会運動研究懇談会の世話人…北牧孝三・木村京太郎」であった。ちなみに参加者は、塩田、井垣、木村、細川、大原健次、小田切と他三名であった。第二回同懇談会は府立勤労会館七階第四会議室で、世話人は北牧と木村兩名が記された葉書案内が手元にある。

こうした経緯を踏まえて、一月の準備会で木村の用意したプリントで、「設立の趣旨」「会則（案）」が提案され議論された。「会の名称」を「京都における（傍点は追加）」とした。第二条「この会は一九〇〇年代における京都地方を中心とする平和と民主主義運動の歴史を調査研究しその発展に貢献する」が、最終的には「会誌」創刊号にあるように落ち着いたようである。私は勤務や組合活動があり、その経緯の詳しい事情は知りえなかった。北牧の住む南区のセツルメントや部落研で、土曜会のメンバーはかなりの頻度で交流を深めていたようだ。

## ○第一回語る会・設立総会

その葉書案内（前略）さて、このたび戦前戦後における「京都の民主運動の思い出を語る」第一回の話し合いを下記の通り開きます」と、二月二〇日に立本寺で「参加費（茶、兼光熱費）」と北牧、木村兩名の世話人が案内状を出している。ただ、木村の起草した設立趣旨にある呼びかけ人の中には、斉藤栄治（三三）、川口是の名前等が載っていたが「創刊号」にはそれがないとか、井垣の準備した呼びかけ人では別の人が記載されている。記憶違いや誤植もあり

## 燎原

「参加・協力を訴えます！」  
「燎原」創刊号の発行にあたって、関係者から多くの御意見をいただきました。その中で、多くの方から「参加・協力を訴えます！」という御意見をいただきました。これは、我々の活動が、単に過去の歴史を振り返るだけでなく、現在の社会運動の発展に貢献することを期すものであることを、御理解いただきたいと思います。また、我々の活動が、単に過去の歴史を振り返るだけでなく、現在の社会運動の発展に貢献することを期すものであることを、御理解いただきたいと思います。また、我々の活動が、単に過去の歴史を振り返るだけでなく、現在の社会運動の発展に貢献することを期すものであることを、御理解いただきたいと思います。

「燎原」創刊号

記録そのものに混乱のあるのはやむ無しと言えよう。

## 不明の人は「和田洋一さん」

前号「この一枚」に載せた民主運動史を語る会創立総会の写真について、助立明弁護士から「正面右にいる人は同志社大学教授の和田洋一先生だと思えます」とのがきをいただきました。編集部内でも「和田さんでは」という声が強かったのですが、この総会の記事中には和田さんの名前はなく、断定できませんでした。

ただ「燎原」第1号の「会員自己紹介」欄に和田さんも紹介されており、編集部のみで総会記事に名前が載らなかったものと思われれます。ご指摘ありがとうございます。ありがとうございました。（湯浅）

湯浅貞夫さんの遺品資料について  
昨年10月23日に南区の、かまがわ出版倉庫に運び、11月18日（日）と24日（土）にダンボールを開けて整理しました。岩井忠熊、井ヶ田良治先生も参加、協力されました。

京都の民主運動史関係の資料は、自分かまがわ出版の倉庫に置き、さらに整理、目録を作ることを目指します。また個人的な遺品類は妹の三双順子さんに持ち帰ってもらいました。口丹波の郷土史関係、農民運動・一揆関係資料類（8箱）については南丹市文化博物館（園部）に寄託する方針です。

# 伏見・洛南の革新の伝統を語る

と き 2月29日(金) 午後3時～

語る人 砂川良昭さん(元・日本共産党洛南地区委員長)

ところ 伏見 そうぞう館 (地図参照)

伏見区深草烏居崎町605 ☎075-647-0048

なお、終了後、同会場で「懇親会」を開きます。  
懇親会の参加希望者は事前に会事務局(☎・fax722-3823)までお知らせください。会費3000円程度。



河本清氏がレ・パ後の人生語る  
12月例会の報告

12月例会は12月14日午後、かもがわサロンで開かれ、全通簡保に在職

中の1950年にレッドパージで解雇された河本清さん(城陽市在住)から、当時の職場の状況や「口頭」で解雇を通告された模様、さらにはパージ後、上京区で生活を守る会の常任をつとめ、仁和診療所開設を実現したことなどを語りました。

また1958年に京都信用金庫の採用試験を受け合格、西陣支店に勤務、のち京信関連会社に出向、城陽市の教育委員も勤めた81年の人生を振り返り「いろいろあったが節を曲げたことはなかった」と語りました。

当日は若い人たちもふくめ16人が参加、その場で3人が入会しました。

例会は隔月に開きます。どなたでも参加できます。会員は無料、会員外の方は300円。

## 情報

### スクラップ



#### 細井和喜蔵碑前祭ひらく

京都府与謝野町加悦の出身で「女工哀史」の著者として知られる、プロレタリア作家の細井和喜蔵碑前祭が、12月1日加悦奥の鬼子母神社で行われました。約50人が参列、大田貴美与謝野

町長や大平勲国民救援会府本部会長らが、紡績女工の過酷な労働実態を告発した細井和喜蔵の偉業を偲ぶとともに「格差社会の今日、後世に伝えるべき」と述べました。

また「細井和喜蔵を顕彰する会」がまとめた記念誌『女工哀史』から80年—いま和喜蔵の声が聞こえる—も披露され、碑前に供えられました。

#### 吉田隆行弁護士を偲ぶつどい

自由法曹団京都支部幹事長や京都府知事選挙の候補者として奮闘するなど

#### 山宣・国領を語る講演の夕べ

活躍された吉田隆行弁護士を偲ぶつどいが12月1日、京大会館で開かれ134人が出席、遺志を継ぐことを誓い合いました。

11月27日夜、上京区の西陣織会館で「山宣・国領の生涯と人間像を語る講演の夕べ」が開かれ50人が参加、宇治山宣会の足立恭子さんと、京都国領会会長で元衆議議員の梅田勝氏がそれぞれ講演、その革命的生涯から学びました。

#### 山宣研究者・佐々木敏二氏偲ぶ

昨年5月に亡くなった佐々木敏二先生を偲ぶつどいが、12月8日午後、宇治市の「花やしき浮舟園」で開かれ各地から50人が参加。宇治山宣会の藪田秀雄会長は、佐々木氏が10年をかけて膨大な資料を読破し、書き上げた『山本宣治(上・下)』によって山宣の全体像が明らかになったと業績をたたえ、山宣の三男浜田繁治氏ら9氏も思い出を語りました。

#### 編集後記



山田洋次監督の映画「母べい」を試写会で観ました。昭和15年、反戦を唱える父が高警察に逮捕され、のち拘留所で死ぬ実話ですが、家族や周辺の庶民の暮らしがリアルに描かれていて感動的です。戦時を知らない人たちに広く見てもらいたいものです。主演の吉永小百合の台詞に託した山田監督の思いが観るものの心を揺さぶります。1月26日から松竹系で上映。

おそらく11年ぶりです。新年の名刺広告を復活しました。「燎原」の発行資金になります。ご協力に感謝。

「私保労結成前後」下は著者の都合で次号に掲載することになりました。本年も投稿や会員拡大にいつそうのご協力をお願いします。(湯浅)

## 京都教職員組合

執行委員長 藤本雅英  
京都市左京区聖護院川原町4-13 京都府教育会館内  
☎075-752-0011 FAX075-751-1091

## 京都市教職員組合協議会

京都市左京区聖護院川原町4-13 京都府教育会館内  
☎075 (771) 9171 FAX075 (751) 0851

## 福祉保育労働組合京都地方本部

執行委員長 前田鉄雄  
京都市上京区竹屋町通千本東入主税町1100-1  
京都福祉保育総合センター内  
☎075-813-4800 FAX075-822-6220

## (社) 部落問題研究所

理事長 成澤栄壽  
〒606-8691 京都市左京区高野西開町34-11  
☎075-721-6108 FAX075-701-2723

## 京都民主医療機関連合会

京都市右京区西院久田町9  
建設会館5F

## 京都民医連中央病院

〒604-8453 京都市中京区西ノ京春日町16-1  
☎075 (822) 2777  
http://kyoto-min-iren-c-hp.jp/

## 社団法人 信 和 会 京都民医連第二中央病院

京都市左京区田中飛鳥井町89  
☎075-701-6111  
URL <http://park12.wakwaku.com/~kyoto2hp/>

## 京都自治体労働組合総連合

執行委員長 山村 隆  
京都市中京区壬生仙念町30-2ラポール京都5F  
〒604-8854 電話075-801-8186 FAX075-801-3482

## 市民とともに市政の刷新を 京都市職員労働組合

委員長 池田 豊

## 日本国民救援会京都府本部

京都市中京区壬生仙念町30-2ラポール京都5階  
〒604-8854 電話075-801-3915 FAX075-822-6632

## 宇治山宣会

会長 藪田秀雄  
〒611-0033 宇治市大久保町北の山11-1藪田秀雄気付  
TEL0774-48-2472

## 市民共同法律事務所

京都市中京区烏丸通二条下ル西側ヒロセビル2階  
TEL075 (256) 3320

## 京都第一法律事務所

京都市中京区烏丸通二条上る蒔絵屋町280番地  
マニユライフプレイス京都ビル4階

TEL (075) 211-4411  
FAX (075) 211-2507

’08 明けましておめでとーうございます

元旦

迎春

京都の民主運動史を語る会

2008年元旦



蓮 佛 亭 湯 浅 俊 彦 馬 原 八 郁 堀 江 八 郎 藤 井 舒 之 田 北 亮 介 黒 住 嘉 輝 川 合 葉 子 小 田 切 明 徳 奥 村 和 郎 稲 田 達 夫 井 手 幸 喜 世 話 人 岩 井 忠 熊 代 表 世 話 人

